

1 学校教育目標

人権尊重の精神を基調とし、広い視野と深い知識、思いやりの心と規範意識をもった、心身ともに健康な中学生の育成
「生徒行動指針」 ○自ら学ぶ ○思いやる ○鍛える

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	義務教育である小中学校で一番に身に付けさせなければならないことは『生きる力』の育成である。大海原を自らの足で歩む力である。そのために必要な経験の場を、意図的・計画的に提供し、望ましい集団活動を通して自己及び集団の向上を図る意識を育む。また、そのために必要な基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと身に付ける学校を目指す。
○児童・生徒像	失敗を恐れずに何事にも挑戦し、「学び」を日常の生活と結びつけ、自分の新たな可能性を見いだせる生徒 ＜「生徒行動指針」に基づいた具体的な生徒像＞ ○病気に負けない、心身ともに健やかな体を身に付けた生徒 ○習得した知識を実生活に生かすような行動を自ら行い、意欲的に経験を積み上げていく生徒 ○自分の力を学級や学年・家族や地域のために進んで役立てようとする生徒
○教師像	○生徒・保護者・地域の信託に応える教師 ○自らの生き方をもって生徒を導く教師 ○組織として迅速に右こくことができる教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

1 学校の現状

- 1) 生徒は元気にあいさつができ、授業態度もよく落ち着いた学校生活を送っている。
- 2) これまで十二中が築いてきた伝統をしっかりと継承している。
- 3) どの生徒も授業に真剣に取り組み、授業が楽しいと言っている。
- 4) 学校行事を工夫して行い、自らの役割を意識した取り組みができている。行事の後の達成感も高い。

2 前年度の成果

- 1) 区学力調査における3科平均通過率が63.7%から63.9%と僅かであるが増加した。
- 2) 「スマイルルーム」の運営が軌道に乗り、多くの不登校生徒が教室復帰を果たした。
- 3) コロナ禍にもかかわらず、「サタデースクール」を継続・実施できた。

3 前年度の課題

- 1) 若手教員の割合が大幅に増え、授業力の向上を急がなければならない。
- 2) コロナ禍による休校や短縮授業により、丁寧に学習を進めることが難しかった。
- 3) 学習した知識を定着させるような授業展開を考えていく必要がある。
- 4) 不登校生徒対応の更なる充実。

4 重点的な取組事項						
	内 容	実施期間（年度）			R: 令和	
		R2	R3	R4	R5	R6
1	学力向上アクションプラン	◎	◎	◎	◎	◎
2	特別活動の充実とキャリア教育の推進	◎	◎	◎	◎	◎
3	不登校・不適応対応	◎	◎	◎	◎	◎
4	生活指導の充実	◎	◎	◎	◎	◎

5 令和4年度の重点目標

重点的な取組事項－ 1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
基礎学力の確かな定着と家庭学習の質的向上		令和 4 年 度 の 目 標 通 過 率 65.0%		到達度確認テストの通過率 5 4 . 1 %		基礎学力の定着が図れていないと言うよりは、得点力に結びついていない。		△	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクション プラン	対象教科 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (＝数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 新規	補充・補習 の充実	国語 社会 数学 理科 英語	通年	【取組内容】 ・放課後に習熟の不十分な生徒を対象とした補習授業の実施 ・教員の計画の元、帝京科学大学の学生インターンを活用し、マンツーマン指導による補習の実施。 【ねらい】 ・基礎学力の定着 ・得点力の向上 【目的】 ・学習のつまずきの解消 ・学習内容の活用力向上	足立区 学力調査	区学力調査正答率 国語 70%以上 数学 55%以上 英語 55%以上	定着度確認テストの正答率 国語 7 2 % 数学 5 0 % 英語 5 0 %	学力の定着に大きな課題のある生徒への対応は概ねできたが、全体としての得点力の向上を図ることができなかった。 中位層の生徒への指導も怠らずに実施していく。	△

2 継続	授業改善	全教科	通年	【取組内容】 ・授業展開を全教科で統一し、導入5分・展開35分・まとめ(振りかえり)10分とし、全教科で実践する。 ・指導力向上中核校の研究で策定した年間指導計画にしたがい、カリキュラムマネジメントを意識した授業の実践 【ねらい】 ・1時間1時間の授業における生徒の学びの確実な定着を図る ・他教科での学習内容を全教員が意識して指導に当たること、生徒の学びを深める。	区学力調査の学習や生活についてのアンケート	『授業が楽しい』の設問に対する肯定的回答 90%以上 『授業がわかりやすい』の設問に対する肯定的回答 75%以上	『授業が楽しい』との設問する肯定的回答 83.7% 『授業が分かりやすい』の設問に対する肯定的回答 87.4%	授業が楽しいと思う生徒は学年が進むにつれて減っている。この現象に対応することはもちろんであるが、学年が上がっても、生徒の「できた」、「わかった」を実感させる授業を行うよう心掛ける。一方で、授業はわかりやすいと思っている生徒の割合は高く、その意味では学習した知識の活用力をしっかりと定着させる必要がある。	△
3 継続	家庭学習の習慣化	全教科	通年	【取組内容】 ・家庭学習ノートを毎日提出 ・生徒の習熟の程度に応じて、まず提出することから内容の充実を図るまで、到達目標を変えて取り組ませる。 【ねらい】 ・家庭学習の習慣化 ・小学校からの学びの継続 【目的】 ・基礎、基本の確実な定着 ・学習の質の向上	生徒による授業アンケート	提出率70%以上	提出率73%	家庭学習の習慣化については達成できた。どの学年においても家庭学習を毎日行うものという意識は根付いている。また、学級通信等を通じて良い取り組みをしている生徒のノートを示し、他の生徒の励みにしている。	○

4 継続	学 習 コ ン テ ス ト	国語 数学 英語	各 教 科 年 1 回	【取組内容】 ・国数英の3教科で基本的な知識を問う問題に取り組ませる。 【ねらい】 ・学習意欲の喚起 【目的】 ・成功体験の積み上げ ・自己肯定感の涵養	3教科の学習 コンテスト	各教科の合格率 国語 90%以上 数学 80%以上 英語 80%以上	国語 95. 1 % 数学 78. 9 % 英語 69. 1 %	学習コンテストを行う意義について認識に差が出ており、英語科においては、難易度をかなり上げていたようで、目標達成には至らなかった。学習コンテストそのものの在り方を再検討することが必要。	△
5 継続	サ タ デ ー ス ク ー ル	全教科	通 年	【取組内容】 ・土曜授業のない土曜日に自学自習による補習 【ねらい・目的】 ・自学自習の習慣を身に付けることで家庭学習の習慣化を補完する。	サタデー スクール参加登録 者数と出席状 況	生徒登録数 30名以上 年間延べ参加 人数 300名 以上	登録生徒数 25名 年間延べ参加人数 483名	今年度は、3年ぶりに従来通りのサタデースクールを実施できた。新型コロナウイルス感染症がまだ終息していない中で、登録生徒数は目標に達していないが、7月2日に第1回を開催して以降、21回開催できた。新しい学習支援ボランティアも確保でき、充実した活動を行えた。	◎

重点的な取組事項－２		特別活動の充実とキャリア教育の推進			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
自己肯定感と自己有用感の高揚を図り将来への希望を抱く		Hyper-Q U と区学力調査の学習意識調査	各項目の達成基準は概ね超えることができた。	指導力向上中核校としての研究を行ったことで、教職員一人一人が、個々の生徒のキャリア形成を意識して教育活動を展開したことで、生徒の自己肯定感と自己有用感を高めることができた。	◎
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
生徒の自尊感情を高める指導の推進	Hyper-Q U における非承認群 15% 以下	・全教員の学級経営力の向上と、全学級における集団活動による経験の場の設定 ・各学年で統一した学級活動の実践	Web Q U における非承認群 15.5%	目標には若干とどかなかったが、学校全体として生徒が相互に協力して、目標を達成しようとする姿勢は身に付いている。	◎
自己有用感の涵養	区学力調査の学習意識調査において、『今の学級をよりよい学級にしたいと思う』と『学級のみんなはお互いに協力し助け合っていた』との設問に対する肯定的な回答が、どちらも 75% 以上	・小学校の係活動を中学生の発達段階に応じて発展的に継承し、ひとりひとりの生徒に自己の集団における役割を自覚させる。 ・生徒相互の良さを認める活動の充実	『今の学級をよりよい学級にしたいと思う』との設問に対する肯定的回答 86% 『学級のみんなはお互いに協力し助け合っていた』との設問に対する肯定的な回答 88%	本校生徒はもともと自己有用感が高いところがあったが、学級委活動を充実させたことで、学校行事が復活したことで、より自己有用感が高まったと考えられる。	◎
将来への希望	区学力調査の『将来の夢がある』との設問に対する肯定的な回答が 70% 以上	・全教育活動においてキャリア発達を促す教育の実践	『将来の夢がある』との設問に対する肯定的な回答 76%	生徒一人一人のキャリア形成を促してきた教育活動の成果と言えるが、将来を思い描けないでいる 24% の生徒のキャリア形成を図っていくことが課題である。	◎

重点的な取組事項－３		不登校・不適応対応			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
不登校出現率の減少		不登校出現率４％以下	不登校出現率０．６％	不登校生徒への支援体制が確立したことで、生徒個々の課題に応じた対応ができた。	◎
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
不登校・不適応生徒を受け入れる学級の雰囲気づくり	Hyper-Q Uにおける学級満足度５５％以上	指導力向上中核校としての研究を通して学級の中に生徒の居場所を確保するとともに、各学級・学年で生徒の活躍する場を設定し、	Web Q Uの学級満足度４６．２％	指導力向上中核校の研究により、学級活動を充実させたことで、学級に親和的な雰囲気が広まり、不登校生徒を受け入れる風土ができた。	○
不登校生徒に対する教室復帰支援	不登校出現率４．０％	・ＳＣ・ＳＳＷと連携し、必要な関係機関との連携を図りつつ、生徒の教室復帰を支援する。 ・スマイルルームを有効に活用しつつ、教室復帰への足がかりとする。	不登校出現率０．６％	スマイルルームに加え、学習に課題のある生徒を対象とした学習支援教室として「キャッチアップルーム」をつくり対応したことで、学習意欲を高める生徒が増え、不登校に至らせずにすんでいる。	◎
不登校・不適応生徒への組織的な対応	特別支援教育推進委員会 年間３５回開催	毎週木曜日の４校時に特別支援委員会を開催し、不登校・不適応生徒の情報を共有し、支援を必要とする生徒へは全校で組織的に援助する。	特別支援教育推進委員会開催回数 年間３５回	特段の事情がない限り、毎週木曜日の２時限目に開催し、予定通り実施できた。今年度後半からは民生児童委員にも加わっていただき、養育困難家庭への支援も始めた。	◎

重点的な取組事項－４		生活指導の充実			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
生徒の内面から学校生活を豊かにしようとする姿勢を育む		Hyper-Q U、ふれあい月間のアンケートにおけるいじめ発生件数	今年度、これまでのいじめ発生件数は９件	道徳の授業や学級活動による集団活動を通して、自他を尊重し、助け合うことの大切さを教えてはいるが、いじめは起こる。早期に発見し適切に対処することが重要である。	△
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
いじめの早期発見・対応	- Hyper-Q Uにおける侵害行為認知群１０％以下 - 学級生活不満足群１５％以下	- hyper-Q Uを活用し、いじめの早期発見に努め、発生したいじめについては「いじめ防止基本方針」に基づく校内「いじめ防止対策委員会」を中心に、全校で組織的にその解決にあたる。 - 生徒会活動や学級活動を通して、生徒自らの手でいじめを抑止しようとする態度を育てる。	Web Q Uの侵害行為認知群 １３．７％ Web Q Uの学校生活不満足群 ２２．４％	いじめアンケートにいじめとして訴えてきた生徒で現在も未解決のものは１件である。重大事態にまでは至っていないが、被害生徒本人が安心して学校生活を送れるような環境を整えていくための働きかけがまだまだ必要である。	△
体罰根絶	体罰発生件数０	年間を通じて教職員の服務に関する研修を繰り返し、生徒の内面に届く指導ができるようにさせる。そのために必要な研修を意図的・計画的に実施する。	体罰発生件数０	教職員には、体罰撲滅宣言として「生徒の可能性を否定しない」ことを徹底し、生徒に対しても「自分の良さを知り、新たな可能性を見つけよう」をスローガンに日々の教育活動に取り組みさせた。教職員と生徒との信頼関係は高まっていると感じられる。	◎

6 まとめ

(3) その他(学校教育活動全般について)

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

【課題】(年度末の到達度調査から)

- ・ 1年生では、国語の正答率が71.1%、数学の正答率が52.6%、英語の正答率は48.8%であった。
- ・ 2年生では、国語の正答率が72.0%、数学の正答率が47.4%、英語の正答率が50.5%であった。
- ・ 基礎学力が定着できていない生徒もいるが、中位層の得点力を上げることも課題である。

【解決の方向性】

- ・ いずれの学年、いずれの教科においても、区の学力調査や全国の調査の分析を徹底し、習熟が不十分な単元は授業で、習熟が遅れている生徒には放課後補習(JUT)でしっかり学び直させる。特に、授業を通して学習した知識の活用方法について、しっかりと生徒に身に付けさせる。
- ・ 指導力向上中核校として行ってきた研究を発展的に継承する。
- ・ 各学年の教科・教科外の全教育活動の年間指導計画を可視化は継続し、生徒に何を学ぶのかを明確に意識させる。
- ・ 放課後補習(JUT)では、帝京科学大学教職コースの学生を学生インターンとして、東京未来大学の学生を学習支援ボランティアとして活用する。その際、進路指導部を中心に組織で対応し、本校教員が中心となって生徒個々人の習熟の程度にあわせたカリキュラムを考え、学生の支援を借りつつ指導にあたる。
- ・ 2年生英語の補習では、JUTの際に新出単語や新出文法を繰り返し学習させ定着を図る。
- ・ 特に学習に課題のある生徒に対しては、「キャッチアップルーム」を設け、そこで取り出し指導を行い学習への抵抗感を軽減させる。

【総括】

本校の多くの生徒は、「授業がわかる」、「授業が楽しい」と感じている。一方で到達度調査を見ると学習の定着が十分であるとは言い難い。このことは、必ずしも基礎基本の定着が図れていないのではなく、学習した知識を活用する力が低く、得点力につながっていないものとする。その証として「授業がわかる」と回答している生徒の割合は高い。知識を道具として使いこなせるスキルを高める指導にも力を入れていきたい。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、生徒は様々な場面で我慢を強いられています。そのような中でも多くの生徒が「学校が楽しい」と言って通ってきております。授業についても、「たのしい」、「わかる」という生徒が8割に達しています。また、令和4年度から少しずつ学校行事を復活し、生徒が経験により学んでいく場を設けてきました。令和5年度は、さらに学校行事を復活し、様々な経験から学んだ自信を学習、特に得点力のアップにつながるよう、教職員一同、更なる授業改善や個別指導に努めてまいります。

(3) その他(学校教育活動全般について)

新型コロナウイルス感染症に配慮した教育活動も3年になった。今年度は全校による運動会を復活し、3年生が中学校生活最初で最後の運動会に素晴らしい勇姿を見せてくれた。宿泊行事もこの3年間で実施できなかった学年も含めて、全ての学年でコロナ以前の形で行うことができ、生徒の経験値を高めることができた。

3年間の足立区教育委員会指導力向上中核校の研究を無事終えることができた。キャリア教育の推進と特別活動の充実を図り、全ての教育活動をキャリア教育の視点で見直し、変化の激しい社会を生き抜く力を生徒に身に付けるべく、全教員で授業改善に取り組み学級を生徒にとって居心地が良く安心して学べる場にするよう研究してきたことは、本校教職員と生徒にとって何よりの財産となった。次年度は、これまでの研究を発展的に継承し、生徒の更なる成長を促す教育活動を進めていきたい。